町民文芸

只見短歌会　令和四年五月詠草

萌ひいでし覚ひ書きなる立て札の汚れ拭き取り花の名たしかむ　目黒　富子

只見高夢の舞台の甲子園健やかプレー心うたるる　関谷登美子

生き居れば七十越えし逝きし娘と施設で朝毎茶をくみ居りぬ　馬場　八智

白き髪気にする程ではなけれどもデパートに来て帽子を選ぶ　新国由紀子

炎天下に筵（むしろ）の上の薇（ぜんまい）を揉みゐるいま亡き母の背遠し　渡部ヨリ子

「きく」と言ふ二人部屋なり明るさのいやまし静かいま吾独り　新国　洋子

只見俳句会　五月定例会

日高俊平太　指導

朝ぼらけ主なき宿の福寿草　真理子

藤の花松坂峠風彩やか　紺　青

夏近し水と戯る童かな　信

薫風を白球に乗せ草野球　都

群衆を避け春愁の湖のほとり　恒　夫

車窓開け吹きし白きは辛夷かな　礼

制服の折目正しく入学す　味代子

水の面やまぶしき空に青柳　一　穂

はらからの村に幾人夏の月　修　一

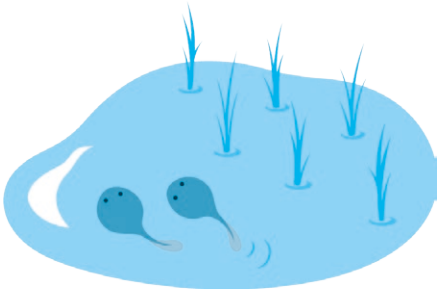
コロナ禍や声をひそめる燕の子

春暁の飯吹き上がる水屋かな

グランドにライトの灯る遅日かな

藤咲いて豆種子まけよ母の声

青芒不揃いなりて大家族

進級の不安を話す桜餅

仏壇の先祖と語る春の雨